

かめづか なかはざま
亀塚・中狭間遺跡 (本発掘調査B)

所在地 安城市桜井町・川島町地内
 (北緯34度55分05秒 東経137度05分53秒)

調査理由 中小河川改良工事

調査期間 令和4年8月～令和5年2月

調査面積 3,220㎡

担当者 樋上昇・永井邦仁・木村有作・池本正明



調査地点 (1/2.5万「安城」・「西尾」)

調査の経過 調査は、愛知県建設局河川課による中小河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県県民文化局から委託を受けて行った。調査区は亀塚遺跡から北の中狭間遺跡までが連続しており、中狭間22A区と亀塚22G区間で遺跡が分かれる。調査区は、亀塚遺跡が亀塚(2AKZ)22A～22G区、中狭間遺跡が中狭間(2ANH)22A～22E区として設定された。調査面積は、亀塚遺跡が1,000㎡、中狭間遺跡が2,220㎡である。

立地と環境 遺跡は碧海台地東縁の崖下を南流する鹿乗川沿いの沖積低地の微高地に立地し、標高は中狭間22A区で約8.3m、これに対して亀塚22D区では約8.2mである。両遺跡は鹿乗川流域遺跡群(北群)の一部を構成しており、特に亀塚遺跡は鹿乗川(旧河道)と台地開析谷から流出する小河川(西町支線)が合流する地点に位置している。

調査の概要 中狭間遺跡では弥生時代中期後葉～弥生時代末期、古墳時代前期、平安～鎌倉時代の遺構と遺物が確認されている。ただし時代によって分布状況は異なり、弥生時代は主に調査区域南部(22A～C区)、古墳時代前期は同北部(22C～E区)に偏る傾向があり、平安～鎌倉時代の遺構はほぼ全域で分布している。以下、調査区ごとに概要を示す。(永井邦仁)

2 2 A 区 中狭間22A区は主な遺構は弥生時代の方形周溝墓3基と平安時代末期の井戸1基である。
方形周溝墓 方形周溝墓は3基確認されている。まず調査区南側の131SZは、北東溝(029SD)と南東溝(025SD)を検出している。025SDが北側で屈曲して029SDの東側と接続し、南側は壁面付近で幅が狭くなることや、029SDが調査区西壁付近で急に浅くなることなどから、調査区内でほぼ南北の対角線以東を検出したものと想定できる。想定される規模は一边10m程度で、周溝は、029SDが幅3.6m、深さ1.3m、025SDは幅1.8m、深さ0.9mとなる。出土遺物は乏しいが、025SD・029SDの基底部付近では、弥生中期のほぼ全形がうかがえる細頸壺を含む土器片が十数点出土しており、029SDからは弥生時代終末期～古墳時代初頭の高杯脚部と、ほぼ同時期と思われる木製品も出土している。現在検討中ではあるが、弥生時代中期に築造され、終末期～古墳時代初頭に再利用された可能性が高い。なお、周溝の埋没は緩やかに進行したものと考えられ、窪地を利用して029SDの中央には017SD、025SDの上面にはやや不整形な形状となる026SDが掘削されている。いずれも埋土中には山茶碗片が点在しており、中世以前に掘削されたものと考えられる。

1 3 0 S Z 次に調査区中央の130SZは、一边約6.0mのやや不整形な隅丸方形となる。周溝は074SDで幅0.8m、深さ0.3mを測る。ただし時期を想定できる資料に恵まれていない。

1 2 9 S Z 3基目は調査区北側の129SZで、北溝が095SD、東溝が093SD、南溝と西溝は屈曲する092SDで構成され、一边8m程度となる。095SD東端と093SD北端が陸橋部となり、幅は2m程度となる。周溝は095SDが幅1.5m、深さ0.6m、093SDは幅1.8m、深さ0.6mをはかる。092SDは幅1.0m、深さ0.5mとなるが、陸橋部の対角線上となる屈曲部では幅0.4m、

深さ約1.0mと狭くなる。出土遺物は093SDからややまとまった量を得ているが、注目できる資料に赤色顔料の付着した台石・鉢がある。このうち鉢は、弥生時代終末期～古墳時代初頭に属する。

- 1 4 2 S K この他に、特徴的な遺構として142SKがある。調査区南端で検出された土坑で、ほぼ全形をとどめる弥生時代中期後葉の壺が、口縁部を北西方向に向けた状態で出土している。

(池本正明)

- 中世井戸 井戸100SEは直径約3.0m、深さ約1.6mの土坑状であり、井戸として機能しなくなった後に井戸側や曲物などを撤去するために掘り返されており、そこへ山茶碗類(碗と小皿)と土師器伊勢型鍋が廃棄された状態であった。井戸の所在地は基盤層が砂質～粘質シルトであるが、井戸の最下部は細粒砂層であり湧水層となっている。

- 古墳周溝か 中狭間A～C区にかけて延びる溝(22A区106SD・22B区015SD・22C区073SD)は浅い皿状の断面をしているが、平面形は屈曲する区画溝の一部と考えられる。出土遺物は少ないが古墳時代の土師器や上層で須恵器杯身が出土している。古墳周溝の可能性はある。

- 2 2 C 区 中狭間22C区は、調査区北東部を近世の池状遺構が占めており、その西側に取り付く小溝がある。それ以外は方位の異なる小溝が北東～南西方向に延びており、池はそれ以降に掘削されたものと考えられる。小溝からは土師器が主体であるが若干の山茶碗類が出土していることから中世の耕作地にともなって施工された区画である可能性がある。そして小溝群に先行する竪穴建物跡7基が検出されている。これらは調査区北端と中部で重複関係のある群構成で検出される傾向にある。一部(053SI)では小型ながら幅広周溝状掘り方が確認されている。出土遺物は寡少なながら古墳時代前期と推測される。

- 2 2 D・E 区 中狭間22D区・22E区でも山茶碗類の出土する溝群が検出されており、これらも22C区同様に正方位から30～40°振れた斜方位となっている。とりわけ22E区037SDは幅約1.3m、深さ約0.7mで最大規模となっている。出土遺物には「大」と墨書された山茶碗がある。また22C区と同様に竪穴建物跡6～8基が検出されており、173SIや180SIでは幅広周溝状掘り方が確認されている。

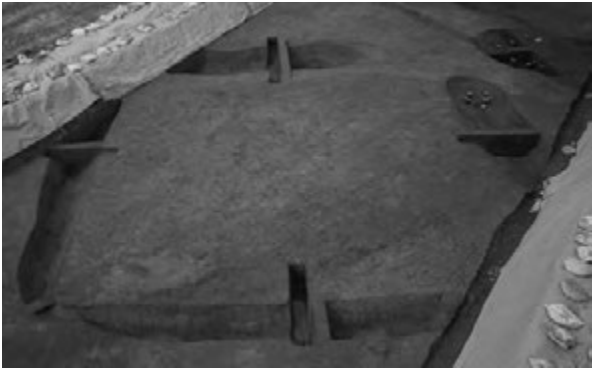
- 亀塚遺跡 亀塚遺跡は弥生時代中期～弥生時代末期、古墳時代前期、奈良～平安時代の遺構と遺物が確認されている。

中狭間遺跡に南接する22G・F区では、亀塚22A区のような弥生時代中期の壺が出土する凹地地形がみられ、そこから南側では周溝墓がないなど様相が異なっており、両遺跡の境界に当たると考えられる。

- 2 2 F 区 亀塚22F区では、長径約3.5m、短径約0.8m、深さ約0.9mを測る長楕円形の大型土坑124SKがある。壁面はほぼ直立している。炭化物を多く含む埋土であり、底部から弥生時代中期の壺口縁部が出土している。当該土坑以外には竪穴建物跡1基と竪穴状遺構2基、また時期不明ながら掘柱穴が10基以上検出されており、掘立柱建物を構成するものと考えられる。

- 2 2 D 区 亀塚22D区では、西隣の20A区から続く奈良～平安時代の溝129SDがある。底部付近で若干のラミナ状堆積がみられるので水流があったことになる。遺物は奈良時代の須恵器蓋やK-90号窯式期の灰釉陶器が出土している。この他にも弥生土器の出土する溝020SDなどがある。

(永井邦仁)



中狭間22A区方形周溝墓129SZ(南東から)



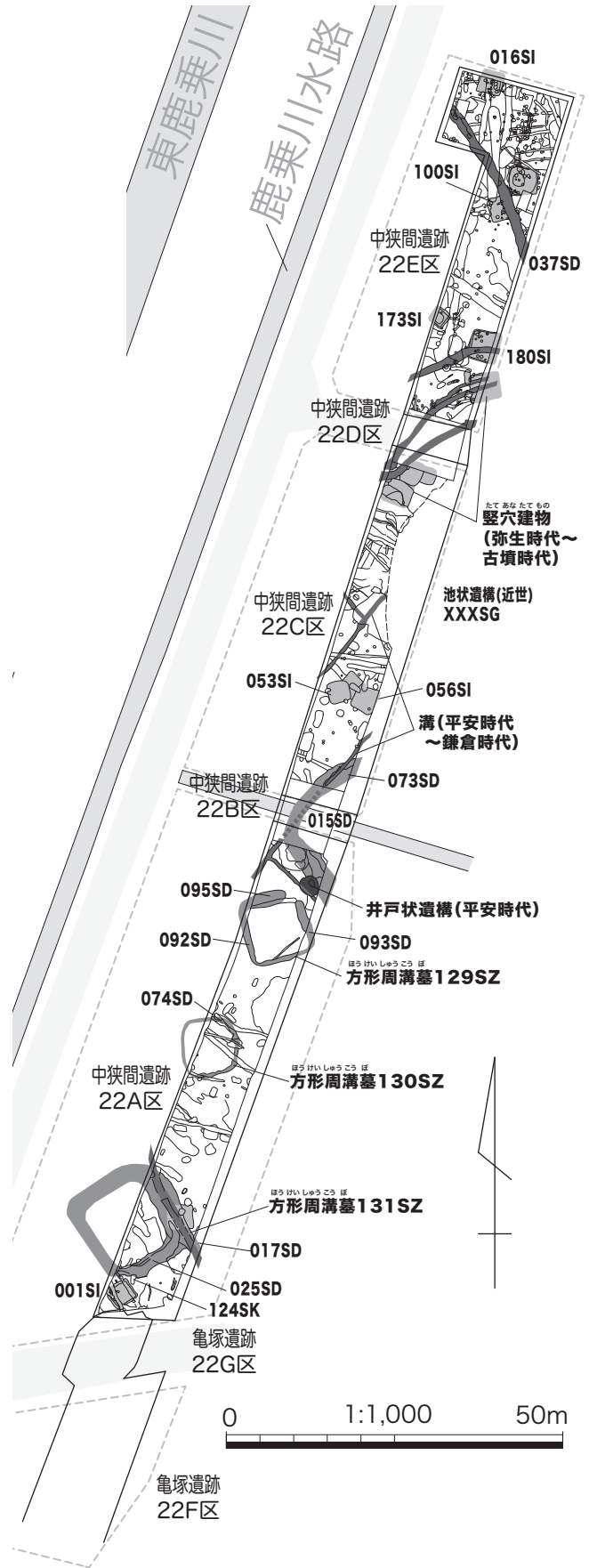
中狭間22A区方形周溝墓130SZ(南東から)



中狭間22A区方形周溝墓131SZ(南東から)



中狭間22A区土坑124SK出土の弥生時代中期の壺(北西から)



中狭間遺跡の概要



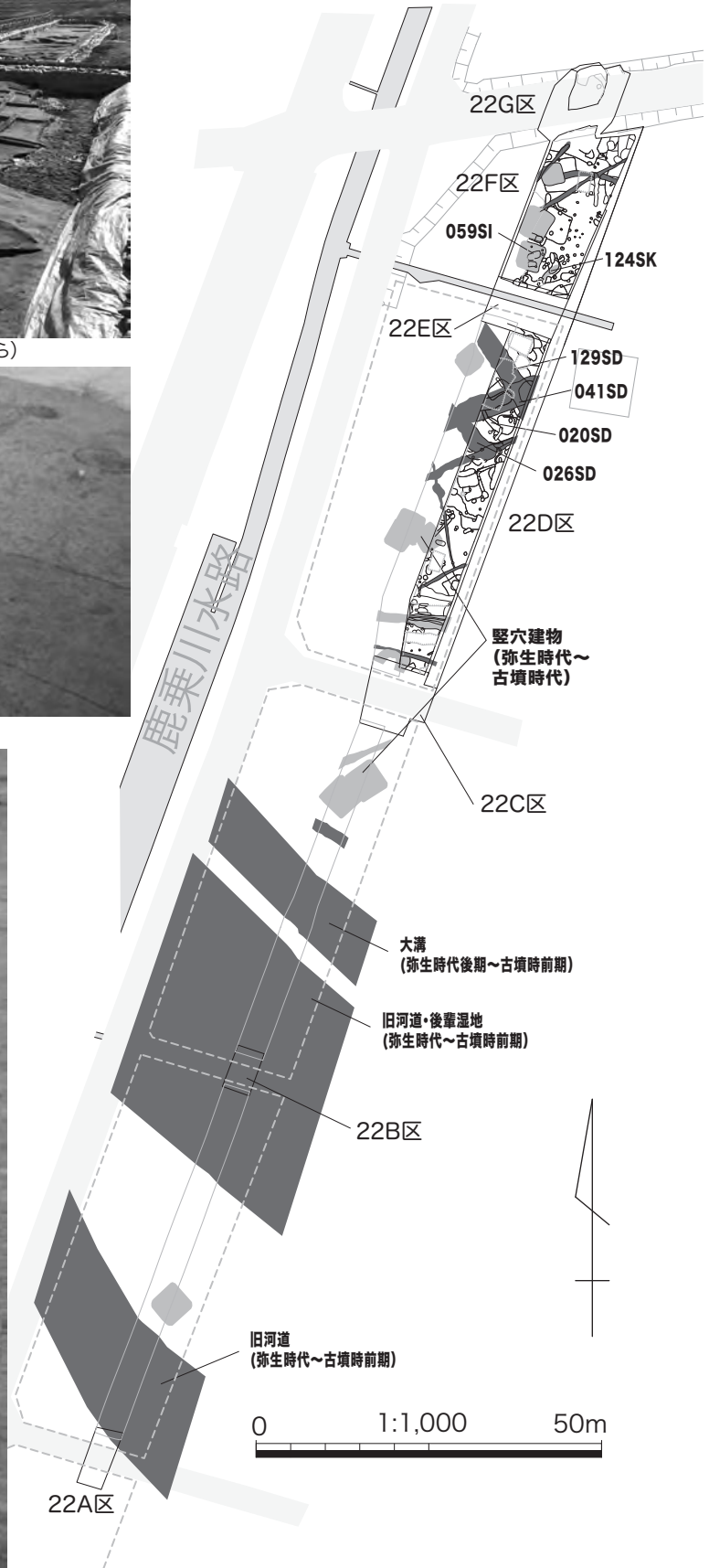
亀塚22F区(手前)・同D区(奥)全景(北西から)



亀塚22F区土坑124SK(南西から)



亀塚22D区溝状遺構020SD(北西から)



亀塚遺跡22D区・22F区の概要